

特集

土器

～暮らしや環境を伝える タイムカプセル～

Focus マウスの性格の違いはどこからくるのか？

科学冒険隊 身近にいる極限環境生物クマムシを観察しよう！

生き物たちの不思議な関係 両生類の卵に共生する緑藻類

かはくレポート 特別展「大哺乳類展3
—わけてつなげて大行進—

縄文人

新しい文様が大きなスズキをモチーフで、丸いお椀をつくらせていた縄文土器で遊んでいた子イヌも今夜の口もちを制作して天宮ひなと飾の幸に恵まれた日本列島では、その動物遺骨を利用する定住性の生活が縄文人は小型だが勇敢で、インシシツメいパートナーだった。

「milsil(ミルシル)」について
「milsil(ミルシル)」の「mil(ミル)」は「見てみる」「聞いてみる」「やってみる」の「ミル」。そのような「ミル」から、新たな、そして豊かな「sil(シル=知る)」が得られるでしょう。この雑誌とともに、皆様が楽しい「ミルシル」体験をされることを願っています。

CONTENTS

3 【特集】土器 ～暮らしや環境を伝えるタイムカプセル～

[全体監修] 小畑 弘己 (熊本大学大学院人文社会科学部教授)

4 土器を掘る 土器のもつ新たな情報の可視化へ向けて

小畑 弘己 (熊本大学大学院人文社会科学部教授)

6 タイムカプセルと魔法の杖 土器圧痕法の現在

小畑 弘己 (熊本大学大学院人文社会科学部教授)

8 土器と民俗例から植物利用を探る

佐々木 山香 (金沢大学古代文明・文化資源学研究所特任准教授)

10 縄文時代末期の穀物栽培を科学的に立証

國木田 大 (北海道大学大学院文学研究科准教授)

12 土器残存脂質から調理内容物を探る

宮田 佳樹 (東京大学総合研究博物館特任研究員)

14 縄文文化における「繊維土器」を解析する

阿部 昭典 (千葉大学大学院人文科学研究科教授)

16 土器の時間から文化変化を明らかにする

先史土器編年の高精度実年代化

小林 謙一 (中央大学文学部人文社会科学部教授)

18 Focus 科学者の探究心にせまる

マウスの性格の違いはどこからくるのか?

—脳内の物質と個体差の関係を探る—

高橋 阿貴 (筑波大学人間系准教授)

22 チャレンジ!! 科学冒険隊

#97 身近にいる極限環境生物クマムシを観察しよう!

國枝 武和 (東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻准教授) 監修

26 生き物たちの不思議な関係 第8回

クロサンショウウオの卵が緑色に変化!?

両生類の卵に共生する緑藻類

宮下 英明 (京都大学大学院人間・環境学研究科教授)

西川 完途 (京都大学大学院地球環境学堂教授/京都大学大学院人間・環境学研究科教授)

30 かはくレポート

特別展「大哺乳類展3 —わけてつなげて大行進」

哺乳類の多様化と収斂進化を考える

川田 伸一郎 (国立科学博物館動物研究部脊椎動物研究グループ研究主幹)

34 次号予告/定期購読のお知らせ/編集後記



新潟県津南町戸ヶ崎遺跡から出土した、材料の粘土に繊維を含む「繊維土器」。
画像提供: 阿部昭典



表紙画像

縄文人の暮らしを再現した国立科学博物館の展示(日本館2階北翼展示室)。料理の煮炊きや食物の保管などに用いられた土器は、このように床に座り、粘土を成形して作られていました。そして、焼く前の軟らかい粘土には、彼らの生活の断片が入り込んでいました。土器研究の分野ではいま、最新の科学技術でその断片から当時の詳しい情報を手に入れるプロジェクトが進んでいます。研究者たちが土器を通して見つめているのは、はるか昔の暮らしや生活環境です。本号の特集を読んでから展示室を訪れば、よりリアルに彼らの生きる姿を感じられるかもしれません。

撮影: 編集部

特集

土器

～暮らしや環境を伝える
タイムカプセル～

[全体監修] 小畑 弘己 (熊本大学大学院人文社会科学部教授)

Q: 日本の土器はいつごろから作られたの?



A: 約1万6000年前の縄文時代に作られ始めました。この縄文土器は世界最古の土器の一つです。多くは縄や竹管、貝殻などで文様を入れた有文土器ですが、無文土器も含まれます。ひび割れ防止の混和材を練り込むなど、1万年以上もの間、さまざまな創意工夫が重ねられました。その結果、人の顔や動物を造形したり漆や顔料で彩色したりと芸術性も磨かれ、北陸地方を中心に出土する火焰型土器が象徴するように、華麗な土器文化が花開きました。土器型式の分布状況からは、土器が作られた年代や当時の暮らし、さらには地域間の交流などもみえてきます。こうしたことから、考古学において土器は時代のモノサシとしての役割を果たしてきました。また、近年では、土器に付着した炭化物の同位体分析やX線、AI技術などを活用した土器内部の種実や昆虫を検出する自然科学の視点を取り入れた研究手法が採用され、新たな事実の発見が相次ぎ、「第二の発掘」ともよばれています。

*弥生時代の開始時期は地方によって異なる。九州は2900~2800年前ごろ、近畿は2600~2500年前ごろと考えられている。